トラック９

（通話のエフェクト）

…もしもし。

あ、お姉ちゃんの声だ。なんか懐かしい。

お久しぶりです。
もう半年ぶりになりますかね。
元気にしてましたか？

よかった。

ん？
うーん…俺はちょっと風邪気味だけど、大丈夫です。

今は…、学校行きながらバイトしてます。
古本屋でバイトしてるんですけど、
うん…前よりは働きやすい、かな。店長もいい人だし。
時々嫌な客来たりはしますけど、まだ大丈夫です。

学校は、相変わらず嫌ですよ。
でも留年したくないから頑張って行ってます。

ちょっと、褒めて欲しいな。

（偉いよ、とか頑張ったね、とか）
うん…、うん…。
ありがとうございます。

はぁ。やっぱりお姉ちゃんの声聞くと、落ち着きます。
うん…安心する。

え？　お姉ちゃんも？

…ふふ、なんですかそれ。　俺が年増だって言いたいんですか？
俺まだ子供ですよ。
お姉ちゃんを落ち着かせられるような要素も何もないですよ。

…でも、そっか。　落ち着くんだ、俺の声で。

…本当は、まだ電話かけるつもりじゃなかったんですけど。

ちょっと話したいことあって…。

…先日、両親が離婚しました。

やっとしてくれたって感じですね。
長かったなぁ。

うん…、親権は父の方に。今は父と二人で暮らしてます。

相変わらず父ともギスギスしてるので、
何かがガラッと変わるわけではないですけどね。

…それでもやっぱり、
俺の家族はあの二人だけだから、
みんなバラバラになると…うん…。
ちょっと、…。
うまく言えないんですけど。

本当に無くなってしまったんだなっていう、
喪失感みたいなのがあります。

まぁでも、
嫌なものが無くなってスッキリしました。

スッキリしたら…、
なんか…、
すごくお姉ちゃんの声聞きたくなって…。

こんなはずじゃなかったんだけどな。
何も感じずに生きていたら、
こんな気持ちにならずに済んだのに。

お姉ちゃんのことだって、
初めは利用するスタンスで、
どうせこの人も依存する相手が欲しいだけだって高を括ってたのに。

それなのに今は、お姉ちゃんのことばっかり考えてる。

もしかしたら、俺が一番純情だったのかもしれないです。

実は俺、
神社でしてる時、
何度も「好き」って言いかけました。
…気づいてましたか？

会うのやめたのも、
本当に好きになっちゃいそうだったから。

でもその時にはもう俺、
お姉ちゃんのこと好きだったんだと思います。

バカですよね。
援交相手のこと、本気で好きになるとか。

…しんどい時にそばにいてくれたから、なんて、
安直ですけど。

でも本当にそうだから。

俺に気がついてくれたのは、
あなただけだった。

…初めて、
純粋な気持ちで好きって思えてるのに、
堂々とできない関係が嫌で、
今のままじゃ、お姉ちゃんのこと連れ去りもできないし、
だから今は離れて…、
俺がちゃんと大人になったら会いに行くつもりだった。

そう考えてたのは本当のことだけど、
お姉ちゃんからしたら、対等に接することから逃げただけに見えますよね。

もうどうも思われてないかなって考えたら、泣きたくなる。

お姉ちゃんとまた会うのは、もっと、ずっと先にするつもりでした。

……でもやっぱり、
前払いで、お姉ちゃんのこと欲しいなぁ…っ

…っていうの、…嘘だから。

（「今どこにいる？」）

今…？ えっと、初めて会ったホテルの最寄り駅にいます。

え、お姉ちゃん？

（通話切れる）

《場面転換》

（♩街の環境音）
（♩走る音）

お姉ちゃん…。

走ってきてくれたんですか？
俺に会うためだけに？

…どうして。
どうしていっつもそういうことするの。
なんで俺のこと嫌ってくれないの！？

俺めちゃくちゃな事ばっか言ってるのに、
最低な事ばっかしてるのに、
なんで、
なんで他人のお姉ちゃんがこんな大事にしてくれるの！？

おかしいでしょ…。
全然理解できないお姉ちゃんのこと。

誰も俺のこと、大事になんかしなかったのに…っ

やめてよ、
また、この間みたいに抱きしめるんですか。
子供扱いですか。
対等に見てくれないんですか。

俺のことちゃんと見てよ！

（ヒロイン無理やり抱きしめる）
（「電話切れてからずっとここで待ってたんでしょ？」）

待ってないです、
お姉ちゃんが来るの待ってなんか…。

…ほんとは、乗るはずだった快速急行、
乗らなかったんです。

ごめんなさい、また嘘ついて、
またお姉ちゃんに酷いこと言った、
ごめんなさい、ごめんなさい…っ
好きになってごめんなさい、
生きててごめんなさい…っ

（ヒロイン強く抱きしめる）

俺お姉ちゃんに、迷惑しかかけてないのに、
こんなに優しくされていいのか、わからない。

自分のことも、よくわからない…っ

こんな…、
承認欲求もろ出しなの気持ち悪いって思わないんですか…？
こんな汚い俺でも、お姉ちゃんのそばで生きてていいんですか？
お姉ちゃんに関わりたいって思っても、いいんですか？

…うん。　うん…っ

俺、お姉ちゃんが好き。
それだけです。

好き。

…あ、俺、いつもの癖で、キスしようとしちゃった…。
ダメですよね。

（ヒロイン、涼のほっぺにキス）
う…、え、なんでお姉ちゃん、ほっぺにキス…？　いいの…？

（「だって涼くん前にしてくれたでしょ？　純粋な愛情表現として」）

あ…！
確かに、お風呂入ってる時しましたね俺…。

え…ほっぺって、「純粋な愛情表現」なの…？

そっか、俺、自然にそういうことできてたんですね。

これからは、キスもハグも、そういうことも、
愛情伝えるためだけにしかしたくないです。
お姉ちゃんだけにしたいから。
だから、俺が大人になるまで待っててもらえませんか？

それまでは…、
お姉ちゃんのこと想うだけなら、許してもらえますよね？

…うん。
俺、バカで純情だし、
依存しやすいから、
ずっとお姉ちゃんのこと好きでいると思いますよ。

…お姉ちゃんも俺のこと、好きって思ってくれてたりするのかなって、
都合のいい解釈してたり。

（ヒロイン、キーホルダーを涼に手渡す）
…え、お姉ちゃん、これ…
レアのチョコイルカ、いいの…？
だって、お姉ちゃんも大事なものなのに…。

…大事だからこそ、俺に…？

うん…ずっと持ってる、大事にします…っ

お姉ちゃん。

こんな俺のこと、信じてくれてありがとう。
許してくれてありがとう。
認めてくれてありがとう。

（ほっぺにキス）

好き。
俺のこと、想ってくれてありがとう。